失敗した向社会的行動への感謝の有無により将来の向社会的行動が生起するまでの心理過程
――原因帰属と自己効力感からの検討――

新島直仁（指導：薊理津子准教授）

キーワード：向社会的行動，感謝，原因帰属，認知や感情，自己効力感

問題・目的

向社会的行動は，「人のためになるような行動一般」（松井, 2014）と定義されている。向社会的行動は，失敗経験後には，その生起が抑制されることが明らかとなっている（山口, 1988）。本研究では，失敗経験後の向社会的行動に注目し，感謝の有無が向社会的行動に及ぼす影響を検討する。

感謝は，他者からの道徳的行為により，自身が利益を得たことを認知した際の肯定的感情反応であり，向社会的行動の動機づけとなる側面もある (McCullough, Kilpatrick, Emmons, & Larson, 2001)。Crano & Sivacek（1982）は，向社会的行動が，相手の役立ったか否かと感謝の有無により，将来の向社会的行動の生起が影響されるかを実験的に検討した。結果，向社会的行動の成否に関わらず，感謝されたときは，感謝されなかったときより，将来の向社会的行動が促進された。しかし，同研究では，参加者が向社会的行動の失敗について，何に原因帰属をしたのか検討されていない。また，蔵永・樋口・福田（2018）は，向社会的行動に対して感謝されたとき，感謝されなかったときのそれぞれにおいて，生じる認知と感情を収集・整理した。その上で，向社会的行動の送り手が受け手に感謝された場合，その後の向社会的行動が生起するまでの心理過程を検討した。結果，向社会的行動の受け手が既知人物か見知らぬ人物かに因らず，感謝されたときでは，向社会的行動を行ったことに対する肯定的感情や認知である「結果への肯定的反応」が将来の向社会的行動を促進した。感謝されなかったときに関しては，仮定された認知や感情以外の変数が，向社会的行動の生起に関わっていることが示唆された。しかし，同研究において，仮定された認知と感情の内容から，成功した向社会的行動を対象とした検討であると捉えられる。そこで，本研究では，失敗経験後の向社会的行動及び，高木（1997）で向社会的行動との関連が示唆されている自己効力感について検討を行う。

以上より，本研究の目的は，失敗した向社会的行動に対する感謝の有無により，将来の向社会的行動が生起するまでの心理過程における，失敗の原因帰属，認知や感情，自己効力感の関連を検討することである。本研究では，向社会的行動に対する失敗の原因帰属又は認知や感情が状態的自己効力感を媒介して，将来の向社会的行動の生起に影響を及ぼすというプロセスに，特性的自己効力感が影響を及ぼすというモデルを設定する。

方法

調査協力者　228名（男性127名，女性100名，無回答1名，平均年齢 40.88 歳 ± 9.63）が調査に参加した。

調査時期　2022 年 8 月 9 日から 8 月 10 日に実施した。

調査方法　Google form を用いた Web 調査を，クラウドソーシングサービスを提供する Lancers で実施した。

調査内容と項目　まず，①フェイスシート（性別，年齢，職業，誕生月）への回答と，②向社会的行動に失敗したとき，感謝された又は感謝されなかった経験を思い出すよう求めた。その経験について，③Weiner et al.（1971）の原因帰属モデルに基づき作成した向社会的行動の失敗の原因帰属に関する項目，④予備調査で収集・整理した認知や感情に関する項目（因子分析を行い，「嫌悪感」因子などを抽出した），⑤Bandura（重久訳　1985）に基づき作成した向社会的行動一般に関する状態的自己効力感に関する項目，⑥向社会的行動に関する項目を尋ねた。最後に，⑦特性的自己効力感尺度（成田他, 1995）に回答を求めた。質問紙は，失敗した向社会的行動に対して，感謝されたときと感謝されなかったときの 2 種類作成し，協力者はいずれかに回答した。

結果と考察

感謝による向社会的行動への効果　感謝された後と感謝されなかった後で，⑥向社会的行動（7 指標）に差があるかを検討するために対応のない　t 検定を行った。結果，「同じ相手」に対する向社会的行動の 3 指標は，いずれも感謝されたときの方が感謝されなかったときよりも有意に得点が高かった（t (221.12 ~ 226) = 5.04 ~ 6.98, ps < .001）。「消極的傾向」は，感謝されなかったときの方が感謝されたときよりも有意に得点が高かった（t (226) = 2.04, p < .05）。「他者一般」に対する向社会的行動の 3 指標は，感謝の有無による違いはみられなかった（t (226) = 0.14 ~ 1.00, ns）。つまり，失敗した向社会的行動に対して感謝されたときは，感謝されなかったときより，「同じ相手」に対する幅広い内容の向社会的行動が生起されやすかった。また，感謝されなかったときは，感謝されたときより，向社会的行動に対して消極的であった。

向社会的行動に及ぼす影響のプロセスの検討　感謝された，又は感謝されなかったことで，⑥向社会的行動に及ぼす影響のプロセスを検討するためにパス解析を行った。以下では，感謝されたとき及び感謝されなかったときの双方に共通して，多くの性質の向社会的行動に対して直接的な影響を及ぼした変数である④中の「嫌悪感」と⑤「状態的自己効力感」に注目して記述する。

「嫌悪感」は感謝されたとき，「同じ相手に対する向社会的行動一般」と「他者一般に対する成功確率の高い内容」以外の向社会的行動（β = -.33 ~ -.18, p < .001 ~ .05）に対する負のパスと，「消極的傾向」（β = .53, p < .001）に対する正のパスが有意だった。感謝されなかったときは，全ての向社会的行動（β = -.58 ~ -.21, p < .001 ~ .01）に対する負のパスと，「消極的傾向」（β = .42, p < .001）に対する正のパスが有意だった。つまり，向社会的行動に失敗したとき，感謝の有無に因らず「嫌悪感」を感じると，将来の多くの性質の向社会的行動が抑制され，向社会的行動に対する消極的傾向を促進すると言える。

「状態的自己効力感」は感謝されたとき，全ての向社会的行動（β = .26 ~ .55, p < .001 ~ .01）に対する正のパスが有意であった。感謝されなかったときは，「同じ相手に対する同じ内容」以外の向社会的行動（β = .30 ~ .55, p < .001 ~ .01）に対する正のパスと，「消極的傾向」（β = -.40, p < .001）に対する負のパスが有意だった。つまり，感謝の有無に因らず，向社会的行動に失敗したとき，「状態的自己効力感」を感じると，将来の多くの性質の向社会的行動を促進すると言える。また，感謝されなかったとき，「状態的自己効力感」を感じると，向社会的行動に対する消極的傾向を抑制した。

本研究の課題と今後の展望　本研究では，感謝の強さを考慮した検討を行っていない。また，特定の場面で生じた行動についての状態的自己効力感を測定できていない。さらに，状態的自己効力感の測定が行動の直後に行えていない。以上から，実験的手法を用いるなどして，再検討が必要であろう。